

## 幕末明治の写真師列伝 第百六回 宮下欽 その二十八

右オーストリア行之分ハ柳骨籠之大形口（\*ーツニ）入納る、上州富岡之写真ハ杉箱二ツニ入納る、

（註：前回の原稿の続き。「上州富岡之写真」は、群馬県の官営富岡製糸場の写真のこと）

「二月十七日 曇正午頃方午後第二時頃迄雪

一、第七時頃宮下三井組へ行候所、時刻早ク候故、役人出張無之故引替不出来、第九時頃帰ル、先生第十二時過事務局へ御出、三井組方金子引替、夫方内田氏へ御廻り、兼而借用致し置候百五拾兩返済致し、双眼写真玉二ツ同氏方御持参、午後第四時頃御帰り、大惣第十一時過來ル、昼飯出ス、兼而調置候菓種等之代之内三百兩払渡ス、同人午後第五時頃帰ル、今日楼上大掃除致ス、

（註：三井組は明治6年（1873）に渋沢栄一により創設された国立第一銀行のこと。内田氏は内田九一のこと。双眼写真玉とはパノラマ写真撮影用のレンズのことであろう）

「二月十八日 晴

一、第九時頃亀井氏兄弟来ル、午後第二時前津田氏・川村氏来ル、先生第十二時過事務局へ御出、午後第一時過御帰り、同時過安田氏来ル、茶出ス、同第二時頃帰ル、今日（同）第三時頃方伊勢万へ行酒会ス、其人員左之通、先生・川村・津田・青山・佐久間・亀井兄弟・三戸・中田・片岡・大山・吉五郎・武助・彦太郎・松蔵・宮下等八拾六人、出会終り同第九時前先生同所より外へ御廻り、第一時頃御帰り、〇例之通休日ニ付先生方一同へ牛鍋ニ而御酒下候、

（註：「伊勢万」は不明だが料亭であろう。先生は横山松三郎、川村は川村瀨窓であろう。津田は写真師・津田境（本姓山田氏）のこと。山田境は明治8年に陸軍省在職中、士官学校において製図石判術及び写真術を練習していた人で、横山松三郎から写真術を学んでいた人物。明治10年に京都へ帰り、新京極金蓮寺北隣空地にて写場を建築し、開業した。その際に姓を山田から津田に改姓した。安田氏は不動産業者のことであろう。青山は写真師・青山三郎であろう。佐久間は後の小樽で開業した写真師・佐久間半真（佐久間範造（元湧谷藩藩士宍戸桑之丞））のことか。亀井兄弟とは、弟子の亀井松五郎（至一）（兄）と亀井竹次郎（竹二郎）（弟）のこと。三戸は弟子の三戸馬太郎。中田は、東京日本橋本町一丁目写真溶液を取扱う洋薬舗・中田清次郎（中清）のこと。片岡は弟子の片岡久米（如松）。大山は弟子の大山武助。吉五郎は指物師の佐々木吉五郎のこと。武助の名がまたあるが、こちらは横山松三郎の向かいに住んだ牧野武助のことか。彦太郎は指物師の佐々木彦太郎のことであろう。松蔵は横山松三郎の実弟で弟子の横山松蔵。宮下はもちろん弟子の宮下欽のこと）

「二月十九日 晴

一、西田氏来リ、菓子・茶出ス、無程（\*ほどなく）帰ル、片岡・松蔵・大山・宮下・竹蔵八五人、午後第九時頃方川口へ行酒会し、同第十一時半前帰る、此後刻、松蔵・大山無断ニ而外出致し夜中不帰、

（註：西田氏は南部藩の商人で、東京商工会議所の指導者、西田耕平のこと。川口は東京橋場にあった料亭「川口」のことであろう）

「二月廿四日 晴

一、第九時半頃宮下事務局へ行、金子受取へき旨ニ而内田氏へ行候所、此程右同局方廿日ニ可相渡旨沙汰有之候間、明日昼飯過ニ事務局へ代人可差出候間、当方ニ而も右時分出張可致旨申出候間、其旨承知致し帰ル、尤内田氏方兼而借用致し置候種板箱一ツ、四ツ立写真大坂鉄橋、西丸大手、鉄道 三枚雞（鶏）卵紙半切ニ致し品、一執持参シ返ス、且同氏江兼而貸置候西京御所之種板四ツ立判四枚持参シ、

第十一時過帰ル、第十一時前北庭氏来ル、先生御同道ニ而川口へ御出、第十二時過一同ニ御帰り、同氏午後第一時頃帰宅ス、善太郎第十一時頃来ル、小盤紙十五状持参ス、昼飯出ス、午後第二時頃帰ル、[右同人江普請向申付ル]同第二時頃蛭子氏御出、菓子・茶出ス、同第四時過御買リ、青山氏横浜へ参り候旨ニ付、ニタ見ヶ浦四ツ立判写真種板一枚下岡先生方へ頼遣ス、同第三時過、鈴木・穂積・飯島之三氏来ル、硝子取二枚致し代金三分請取、武助私用相済、楼上之事ニのミ取懸リ可申旨、同第三時頃申出ル、

（註：内田氏は内田九一のこと。北庭氏は北庭筑波のこと。善太郎は吉野町の山谷善太郎であろう。横山は善太郎へ焼き枠の台をよく注文している。この蛭子氏は開拓使御用掛に任ぜられ権戸丸船長となった蛭子末次郎であろう。この青山氏は写真師・青山三郎のことか。ニタ見ヶ浦は伊勢の「二見ヶ浦」であろう。下岡先生は下岡蓮杖のこと。鈴木・穂積・飯島之三氏は不明だが、鈴木は写真師・鈴木真一と思われる。武助は弟子の大山武助のこと）

「二月廿五日 昨夜雪降昼頃方晴

一、第十二時頃時計師大隅方手代来ル、午後第二時ニ帰ル、[〇]同第一時頃蛭子氏御出、同第四時御帰り、[〇]宮下同第二時事務（註：「局」は欠けか）へ金子受取ニ行候所、官員不残引取候故無抛引取、返り道中橋松崎氏へ立寄、過日郵便ニ而来り候手紙申訳致し、夫方内田氏へ廻り事務局之様子如何哉承り候所、今日代人遣候処甚取込居候間、明後廿七日可参旨申候間ニ付、無抛帰宅之旨挨拶有之、帰り同第六時過[〇]同第二時おてふ殿・たか供ニ而小林氏方加納氏へ御出、当家へ土産物御持参有之、同第五時頃御帰り、[〇]同第三時牧野・大坂・大島・春水殿来ル、黍かん・蕎麦羹ニ而拾本為土産到来ス、先生御面会有之、菓子・茶出ス、同第四時帰ル、[〇]吉五郎妻同第七時過來ル、夜泊ス、

（註：この蛭子氏も蛭子末次郎であろう。中橋松崎氏は写真師・松崎晋二のこと。「おてふ殿・たか」は、横山松三郎の妻・蝶と、使用人のおたかであろう。「小林氏方加納氏へ」の加納氏は大坂造幣寮に出仕して新貨幣製作に従事し、刀装具製作もしていた加納夏雄のこと。牧野・大坂・大島・春水殿も不明だが、牧野は牧野武助であろう。吉五郎妻は、指物師の佐々木吉五郎の妻・きよのこと）

「二月廿七日 晴風吹夕方方風落る

一、第十時榎田清七（安太郎）殿来ル、菓子折一持参ス、菓子・茶・昼飯出ス、午後第三時帰ル、[〇]宮下第九時半事務局へ金子受取ニ行候所、懸り会計方役人早引取致し、先日差出置候印書、見へ兼候間、明第十時頃ニ出頭可致旨ニ付引取、午後第三時頃帰ル、[〇]楠山氏午後第四時半頃来ル、画入蘭書一冊持参、先生御借置被遊同人頼合ニ付、富岡製糸所・同所山水・事務局大燈桃・二見ヶ浦与三部入之双眼対写真、八枚并枕目鏡一ツ貸遣ス、其節菓子・茶出ス、同第五時半頃帰ル、同第五時頃蛭子安積殿郵便来ル、紙屋貞蔵殿方郵便来ル、即刻上封致し、又候（註：またぞろ）郵便ニ而差出ス、

（付箋一枚挿入）「売物許可」

（註：榎田清七（安太郎）は不明。「目鏡」とあるのは、ステレオ写真を見る際のステレオビューアのことであろう。楠山氏は東京新橋竹川町の写真画問屋・楠山秀太郎のことであろう。紙屋貞蔵も不明だが、「紙屋」ということから写真台紙などの写真材料商か）

（※「方」は平仮名の「よ」と「り」の合字）

（森重和雄）